そうだ、狩人になろう

楽ちん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
そうだ、狩人になろう

【Ｎコード】
Ｎ４４９７Ｄ

【作者名】
楽ちん

【あらすじ】
ある少年が、ある日とんでも無いことに！ここ日本じゃない！さぁどうする少年、彼に未来はあるのか！？帰る術は！？モンスターハンターをベースにした、オリジナルの小説です。基本はコメディです。多少、いや全然本編と違う部分も多々ありますが、気にしないでくださいね。

第1話　ここ日本…じゃ無いよねぇ（前書き）

この小説は、たまにグロテスクな描写があるかもしれませんよ。無いかもしれません。

第1話　ここ日本…じゃ無いよねぇ

俺は…っていうか俺達は、ちゃんと生活していた筈だったんだ。昨日まで。

もう！ここはどこだよ！

時間は前日まで逆上る。

俺の名前は金田孝（かねたたかし）。よく呼ばれるあだ名は金（きん）。中国人か！

あ、言っておくけど、純粋な日本男児ですよ。

そんな俺は、ちょっぴりお茶目な高校生だ。そんで毎日同じ様な気の抜けた日々をおくっていた筈だった。

ってそんな事は覚えてるっつーの！問題は、何故今俺はこんな密林で佇んでるかって事だっつーの！

まったく、どういう事だ。恐いったりゃありゃしない。

よし、とりあえず昨日の事をしっかり思い出してみよう。

ホントに何か出そうで恐かい。大丈夫そうな木陰に移動してから、俺は記憶の糸を辿る。

時間は、逆上る

俺は放課後いつもの様に、友人の山本修平（あだ名はシュウ）と遊びほうけていたんだ。

カラオケ行って、ゲーセン行って。
そんで暗くなって来たから
「そろそろ帰るか」って、2人で歩いてたんだ。

その途中の公園で…そうだ！変な猫に会ったんだ！…いや、猫か？アレ。喋ってたし。
でも頭良いシュウも猫って言ってたしな、じゃあ猫だろうね。

…。

おぉ！原因あの猫だ！ぜってーアイツだよ！分かっちった。
あの野郎！今度見つけたらなんかこう、鍋とかに詰めて写真撮ってやる！流行のネコ鍋ですよーみたいに！

…まぁそれはいいか。今は大事な回想シーンだし。これを怠ったら、もう意味分かんなくなっちゃうし。

んーでももうちょっと引っ張っちゃおうかなー。ほら、テレビと

かでもアレでしょ？大事な所はＣＭの後にするでしょ？

…ダメ？ですよねー。話進まないもんね。

よし！とりあえず次回までに俺もよく思い出しておくから、回想シーンはそん時にしようぜ！

第1話　ここ日本…じゃ無いよねぇ（後書き）

グロテスクな描写は、ありませんでしたよ。

第2話　あの日、あの時、あの場所で。…あの猫と（前書き）

現実に戻って来ません。記憶にトリップです。まだまだハンターまで辿り着きませんが、暖かい目でご了承ください。

第2話　あの日、あの時、あの場所で。…あの猫と

よし、よく思い出した。
回想シーンの続きと行こうか。

俺とシュウは家への帰り道の公園で、変な猫を見掛けたんだ。

「なぁシュウ？」

「なんだよ」

「猫って…何本足だっけ？」

「そりゃあお前、４本に決まってんだろ？」

「俺もそう思ってた。でも…アレ」

「なんだよいきな…なんだアレ！」

公園のベンチには、まるで人間の様に座った猫が美味しそうにおにぎりを頬張っている姿がある。両前足でおにぎりを持って、だ。

興味を持った俺達は、その変な猫に近付いて行ったんだ。

目の前まで来るとその猫は顔をあげて、

「こんばんわニャ」

と、笑顔をつくる。

「…なぁシュウ？」

「…なんだよ」

「猫って、喋れるっけ？」

「…分からない」

2人共時が止まったかの様に、しばらく呆然としてしまったよ。

「あ、ちょうど良かったニャ。今何時ニャ？」

変な猫が口を開く。俺は反射的に、答えてしまった。

「あ、えっと、8時すぎ…です」

まさか猫に敬語を使う日が来るとは思わなかったっつーの。シュウはまだ固まってるし。

「ニャ！？もうそんな時間ニャ！？どうしようかニャ。怒られるニャ」

猫はなんだか焦ってた。ご帰宅のお時間だろうか。
っていうかニャーニャーうるさい。

「しょうがないニャ。お2人、今からちょっと質問するニャ」

「なんすか？」

「…」

危ない事には極力関わりたく無かったけど、まぁ質問くらいいいかな。
なんか猫については割と慣れてきた。けど、シュウはまだダメっぽい。口が金魚みたいにパクパクしてるもん。

「お2人共、夢は見るニャ？」

「うん。」

「…」

「ほら、シュウ！」

「…あ、はい！」

「じゃあ次ニャ」

猫は何かをメモしてる。ずいぶん器用な猫だ。
その後も質問は何問か続く。あんまり長い時間はめんどくさい。

「…じゃあ最後の質問ニャ。この世界じゃ出来ない体験をしてみたいニャ？」

「…うーん」

俺はしばらく考えて、
「はい」と答えた。

「…まぁ俺も出来るなら、してみたい。かな」

どうやらシュウも同意見っぽい。まぁこんなつまらない毎日に嫌気がさしてたのは、お互いホントだ。

猫はサラサラと何かメモした後に、綺麗な玉を取り出したんだ。

「これをよく見るニャ！」

第2話　あの日、あの時、あの場所で。…あの猫と（後書き）

そろそろ回想シーンから戻って来る予定です。

第3話　悪い予感しかしないんですけど…（前書き）

戻って来ました。ベタベタな展開は、目をつぶってください。

第3話　悪い予感しかしないんですけど…

「これをよく見るニャ！」

あぁ見たさ、見ましたよ。2人して、目が皿になるくらい見ましたよ。

その瞬間なんか玉がピカーってなって、目がうわぁーってなったんだ。

んで、気がついたら密林に独りぼっちよ。以上！思い出話はおしまい！

…泣いちゃおうかな。

っていうかね、さっきから後ろの方で獣の様な声がするんだよ…

こえーよ、振り向けねーよ。

でも、勇気を出してちょっとだけ…

ギャアァス

…！んなぁぁぁ！アァホなぁぁぁ！

俺は途端に走り出した。もう全力の中の全力で。

だってね？後ろに青い恐竜が口開けてたんだもん！明らかに肉食の顔してたァァァァァァイヤァァ！

追って来たぁぁ！

もう無理！ヤバイ！ぜってー死ぬ！早えーってアイツ！死ぬって！ぬおぉたぁぁすぅけぇぇぇい！

ガツンッ

ズザァァー

あー露骨に転んだ。木の根っこ的ななんかにつまづいたらしい。足とか痛い。それよりも後ろ見たら、恐竜が2匹に増えてる。もうアレだ、俺の人生はここでおしまいだ。間違いない。

とりあえず目をつぶったら。

「後ろに」

ん？誰かなんか言った？

ゴン　グシャア　　バシャ

決して気分の良いとは言えない音が鳴り響く。

恐る恐る目を開けるとそこには、全身ピンクの人が。

「大丈夫だったか？」

声からすると、どうやら女性っぽい。っていうかピンクは、センス的にどうなんだろう？

「あ、はい」

とりあえずお礼を言っておいた。女性は呆れた表情で、溜め息をつく。

「…まったく、こんなジャングルで武器も鎧も無しに何やってたんだ？」

「いや、っていうか…ここどこ？何国？」

「ナニコク？何を訳の分からないことを言ってるんだ？…よし、とりあえず村に行こう。ちょっと待っていろ」

女性は、恐竜の死体から何かを剥き取ってる。うわー、何やってんだよ気持ち悪い。

しばらくすると満足したのか、膨らんだ袋を俺に持たせた。

「よし、行くぞ」

行くぞじゃねーよ！結局ここどこなんだよ！

言いたかったが、一応命の恩人なので黙っておいた。

そうしてなんか村に続くらしい道を、俺は付いて行ったんだ…

第3話　悪い予感しかしないんですけど…（後書き）

次回、ついに村に！…着くかな？

第４話　彼女はアナさん、俺は金（前書き）

ギリギリ村に着く辺りです。ようやく「ハンター」という名前が出て来ます。名前だけです。

第４話　彼女はアナさん、俺は金

「やっぱり、日本じゃないんだ…」

「ああ。そんな所は聞いたことも無いな」

村に向かうらしい道中、俺はこの女性と頑張って打ち解けた。
この女性の名前はアナスタシア、年齢は秘密らしい。まったくいつの世も、どうして女性はこう年齢を気にするのかね。
だけど兜を脱いだアナさん（勝手に命名）はとても綺麗な顔立ちで、日本に居たらきっとモデルさんとかの仕事が似合いそうだ。
黒髪のロングヘアーも似合ってる。

背中のでっかい棍棒みたいなのが無ければね。

そうそう、今俺達が向かってるのは
「シーバ村」と言う所らしい。なんでも、２、３年前に出来た新しい村だそうだ。
アナさんは、最近そこに赴任して来たハンターってやつらしい。まぁ詳しい事は知らないけど。

「それにしてもアレだね。ピンチに駆け付けるなんて、王子様みたーい！」

「…それは女性が言う台詞じゃないのか？」

「だって俺！気付いたらジャングルに居たんだもん」

「お前、本当に記憶喪失じゃないのか？」

アナさんは、俺を記憶喪失の少年だと思ってたっぽい。
でも違う。日本の事、昨日の夜の事まで鮮明に覚えてる。
何度説明しても、アナさんは渋い顔をするばかりだ。

「突然別の世界に移動するなんて…にわかには信じられないな」

「だから何度も言ったじゃん！変な喋る猫がね？綺麗な玉をこう、ピカーって」

「喋る猫とは…やはりアイルーだよな…。まぁ詳しい話は村に着いてからだ」

アイルーってのが気になったけど、正直お腹が減って聞く気にもならない。
昨日の夜から何も食べて無いから、当たり前っちゃあ当たり前だけど。

「アナさーん！お腹減ったー！」

「もう少しで村に着くから、我慢しろ」

「こんなに断食してたら俺、ガンジーになっちゃうよ。悟り開いちゃうよー！」

「？…ガンジーとはなんだ？」

「あーそうか。なんでも無いです」

説明する体力も無い。今はただ歩く事だけに力を注いだ。
多分それから2時間程歩いて俺が口を開く元気も無くなった頃、ようやく村の入口らしき門が見えた。

「見えたぞ。あれがシーバ村だ。」

「ぜ、全然…もうちょっとじゃ無い…じゃん」

お腹と背中がくっつく、とはまさにこの事だ。
体内に残ってる全カロリーを消費して、なんとか門に向かう。…が、
あと２００ｍくらいの所で、俺の視界は真っ暗になった。

第４話　彼女はアナさん、俺は金（後書き）

村の名前とかは、なんとか気にしないで下さいね。勝手に命名しました。一応アナさんの武器は、ハンマーです。

第5話　そう！腹が減っては何も出来ぬ！（前書き）

この辺からオリジナル要素がバンバン出て来ます。
モンスターハンター本編と違っても、寛大なお心で許してくださるとありがたいです。

第5話　そう！腹が減っては何も出来ぬ！

ここは…

あ、お母さんじゃん。お母さーん！今日のご飯はオムライスにしてくれない？

メチャクチャお腹減っちゃってさー。なんたってずっと歩いてて…

…あれ？なんで歩いてたんだっけ…えーと、

「…君」

「…ン君」

「…キン君！」

ガバッ

「お、お母さん！」

「やっと起きたか。私はキミのお母さんじゃない」

「あ、アナさんか。…ここは？」

ずいぶん見慣れない景色だ。なにより天井がある。

「病院だ。」

「病院…って事は、村に到着？」

「そうだ。門の手前でキミが倒れたから、私が連れて来たんだ」

「さぁーすがアナさん！頼りになるぅ！」

アナさんは、露骨に溜め息をついた。と同時に、俺のお腹がグゥーと鳴る。

忘れてた。

「アナさん！ご飯！」

俺の要求を聞いたアナさんは、隣りに居た白衣のおっさんを見る。

おっさんは苦笑いで頷いた。

「よし、じゃあ何か食べに行くか。仕方無いから私が御馳走してやる。金も持って無いだろうからな」

俺はひゃっほう！とベッドから飛び起き、アナさんを急かす。

「ごっはっんー♪ごっはっんー♪おーいーしーいーごっはっん♪」

「…その歌はやめてくれないか。恥ずかしい」

アナさんに連れられて来たのは、酒場の様な建物。意外と広くて良

さげだ。

「さてと、何を食べたい？」

「えーとね、とりあえずいっぱい！」

メニューを見たけど、なんの動物かよく分かんないのばっかりでどれを頼めばいいかさっぱりだった。

「じゃあ私が良さそうなのを決めておくよ」

そう言ってアナさんは、店員を呼ぶ。そんで若そうな女性の店員になにかメニューを告げた。

店員がテーブルを去った後、アナさんは頬杖をついてこちらを向いた。

「さてとキン君、キミの事を聞かせてくれ」

全部話したさ。別に隠す様な事でも無いし。
日本の事、シュウの事、昨日の夜の事。

全部聞いた後、アナさんは考え込む様に渋い顔をした。
この人は、この顔が癖なのかもしれない。

「キミが嘘をついているとも思えないし…」

「もちろんですとも！誓います」

「やはり私には判断しかねるな。食べ終わったら一緒に村長の家に行こう」

お偉いさん行き決定だ。苦手なんだよね偉い人。
でもまぁシュウも心配だし、それがいいかな。

そう話してる間に、料理が到着。

「まぁとりあえず、食べな」

「はーい！いただきます！」

第5話　そう！腹が減っては何も出来ぬ！（後書き）

一応頼んだ料理は、アプトノスやガウシカの肉料理メインと思って下さい。
草食動物の肉の方がおいしいらしいですからね。

第6話　全然フツーの爺さんと、あと説明が多いお話（前書き）

ちょっと解説みたいになりました。
まぁちょっとずつですが話も進んでるんで…

第6話　全然フツーの爺さんと、あと説明が多いお話

いやー食ったー、今世紀最大に食ったよ俺は。

たった1人で計15品を平らげた俺は、ものの見事にアナさんの顔色を悪くさせた。

でも

「今日の代金はぜってー働いて返すから！」と約束して、金銭問題はなんとかことなきを得た。

あ、そういえば食事中にも、色んな話を聞いた。例えばジャングルで俺を襲った恐竜は

「ランポス」って言うんだってさ。

一応身長175cmの俺と同じくらいデカかったのに、あれでも小型らしい。

じゃあ大型って何メートルよね。恐い恐い。

あとハンターってのは、正式には

「モンスターハンター」。あーいう恐竜（正しくは飛竜とかって言うって）達を狩ったり、そういう関係の仕事らしい。

まぁ俺には関係無いか。俺はシュウを見つけて、日本に帰れれば満足だしねー。

あ、あの猫もやっつけてやらないと！

どーしてくれようあの猫。服とか脱がせて、なんかその辺の野良と一緒にして写真撮ってやろうか。

猫って言えば、あの猫は

「アイルー」って言ってこの世界じゃ割と良い奴っぽい。
料理や、掃除もやってくれるんだってさ。後でアナさんちのアイルーを見せて貰うことにした。

「ああそういえば、ここの村長は龍人族だ。失礼の無い様にな」

「…リュージンゾク？」

食事も終って、村長の家への行きしなにアナさんが教えてくれた。

「簡単に言えば龍人族とは、私達人間よりも長生きな種族だ。長く生きてる分とても博識で、この辺の村では村長等の役職に多く見られる。まぁ私もそんなに知ってる訳では無いけど」

マジで！？龍人！？緑色の鱗とか、太い尻尾とかしか頭に浮かばない！どうしよう、喰われちゃうんじゃないか。

「まぁ見た目は私達と変わらない。そんなに気負いするな」

「ふぁーい」

返事はしたけど、安心は出来ない。俺の頭の中では、右手に変な玉を持って宙に浮いた細長い爺さんが…

…玉！

「アナさん！村長は玉持ってる！？」

「…私は、そういう類いの話は…あまり好きじゃ無いな」

「？…！違うっつーの！下ネタじゃ無い！俺を連れて来たアイルーが持ってた、玉！」

「あ…、ゴホン。いや、分からないな。着いたら聞いてみよう」

アナさんが耳まで真っ赤にして答えた。
勝手に勘違いしたんでしょうが！でもちょっと可愛い。

まぁそんな話をしてるうちに、どうやら村長の家に着いたらしい。

アナさんが家の前に居た男に何か話をして、扉が開いた。

「入るぞ」中に入ると、数人の男女とでっかいイスに座った爺さんが話をしていた。

「おおアナスタシア。なんじゃ？報告はもう済ませたはずじゃが」

「いえ、先程話した少年を連れて参りました」

口ぶりからすると、この爺さんが村長か。あれ？ちっとも緑色じゃない。

（アナさん、この村長ちっとも龍じゃない！偽者だぜ！）

（だから見た目は変わらないと言ったろう。この方は本物だ）

「いいかな少年」

ヒソヒソ話してた俺とアナさんに、村長らしい爺さんが水をさす。まったく、空気を読まない爺さんだ。ＫＹだＫＹ！

「まずは自己紹介じゃな。儂が村長のハシムじゃ」

あら、どうやら本物の様だ。じゃあやっぱ敬語使うべきよね。

「あ、はい。金田孝です」

「おや？アナスタシアからは、キンと聞いておったが？」

「あーえっと、それはあだ名で…いや、キンで大丈夫です」

「そうか。ではキンよ、お主の話を聞かせてくれ」

ま、またぁー？アナさんに話したじゃん！何度も！
俺はめんどくさい顔でアナさんを見るが、彼女は
「話せ」と言わんばかりに顎で促す。
はいはい、話しますよー！話せば良いんでしょ！
何度も話して嫌になった体験談を、もう1度話す。

「…なるほど。ではそのアイルーが、お主と友人をこの世界に連れて来た、と」

「はぁ…。多分そうだと思います」

実際シュウはこっちに来たかも分からないけど。

村長は少し考え込んで
「よし」と呟く。

「分かった。アイルーと友人の件は、他の村にも尋ねてみるとしよう。新参者が現れた村があれば、多少なりとも話題にはなっておろう」

「マジですか！ありがとうございます！助かります！」

「じゃがそれまでは、お主も何か仕事に着いてもらう事になるが…」

「オッケーオッケー！オッケーですよー！」

「…」

ヤバイ。これは、俺がＫＹか？フレンドリーすぎたか？
まいったね。アナさんの顔が鬼の様だ。

「…ま、まぁ良い。これ、アナスタシア。お主、このキンをなにかと世話してやっては貰えぬか？」

「は？私がですか？」

突然のお願いに、アナさんにしては間抜けな顔を見せる。

「は、はぁ…。分かりました」

「うむ。それでは頼んだぞ」

アナさんはホントに渋々了解した雰囲気だ。

まぁその後村長の家を後にして、またアナさんに言われるがまま村を歩き出した。

第7話　えーと、うん。そうだ、ハンターになろうっと！（前書き）

ようやくハンターになろうと決意します。
展開遅いですよねー。まぁ実際違う世界に行ったら、何気無い事でもドラマになるはず…と自分を勝手に納得させてます。

お気楽な感じで読んで下さると、読みやすいかと。

第7話　えーと、うん。そうだ、ハンターになろうっと！

村長の家を後にして、アナさんに村を案内して貰えることになった。
村はもう夕暮れ時。
俺はとりあえず一段落着いて、テンションが上がって来た。

「あ、村長に玉の事聞くの忘れちった！」
「っていうか仕事は何やろうかなー？ねぇアナさん。何が1番儲かるかなー？」

「…この辺で1番稼げるのは、…やはりハンターだな」

「ハンターかぁ。魅惑の響きだけど俺、恐いのは嫌いなんだよね。楽ちんが好き」

「そうか…。しかし村の外には危険も多い。強くなっておいて、損は無いぞ。まぁ本当ならば…」

確かに。これからもしシュウが見つかれば、どうしても外に出ないといけない。そんならハンターとかやっておいて、いざと言う時の為に強くなっとくのも良いかも。

「キン君？聞いていたか？」

「…あ、はいはい？」

「聞いていないと思ったよ。いいか？本来ならばハンターになるには、あそこにある訓練所を卒業しなくてはいけない。しかしキミにやる気があるならば、私が実戦で指導しても良い」

「えーと、実戦とは？」

「クエスト…つまり、飛竜や獣を相手に私と共に戦う、と言う事だ」

どんな無茶だよ！死ぬっつーの！練習無しでの本番なんて、どんな時も失敗するパターンじゃないか！

…。でもシュウがいつ見つかるか分からないしな。訓練所で勉強してる時間なんて無いんじゃないか？

ちくしょう。仕方無い。

「…優しく、してくださいね？」

「それは君次第だ。」

手厳しい。もうちょっと優しい言葉が欲しいのに。

「まぁ手続きは明日として、ハンターになるとするとまず必要なのは…武器防具か。ちょっと待っていろ」

そう言うと、アナさんはどっかの家に入ってってしまった。
独りぼっちは寂しいじゃないか。早く戻って来てアナさーん。

しばらくしてアナさんは、でっかい袋を持って戻って来た。アレか。
俗に言うサンタさん気取りか。

「よし、武具屋に行こうか」

俺は言われるがまま、ピンク色のサンタクロースに着いて歩く。
少し歩いた先に、武具屋と呼ばれる建物はあった。
店先にはイカついおっさん。中からは、なにか金属を叩く様な音がする。

俺が住んでた平和大国日本では、武器とかは必要無かったからなんか変な感じだ。

「ようアナスタシア。今日はどうした？」

イカついおっさんは顔が恐いくせに、なんか割とフレンドリーだ。

「この素材で、彼に防具を作ってやってくれないか」

おっと。どうやらアナさんは、俺に防具をプレゼントしてくれるっぽい。

「なんだ坊主。見慣れない顔だな！」

「ああ、彼は今日この村に来たばかりだからな」

「なんだアナスタシア。彼氏か？」

「違う。それよりいつ頃出来上がる？」

「…んーまぁお前の頼みだ。明日までにはなんとかやっておくぜ」

「そうか、頼む」

俺をおいてどんどん話が進む。一応主人公な筈なのに。

「坊主、身長はどのくらいだ？」

おおやっと出番だ！バッチリ喋ってやらないと！

「ひゃ、１７５…」

「分かった！任しとけ！良いやつ作ってやるからな！」

言わせろよ！ちくしょう、このおっさん無駄にキャラが濃い。目立ちすぎだっつーの！

まぁ、俺の防具を作ってくれるんだから我慢してやるか。
それにしても、アナさんはホントに良い人だ。ご飯も奢って貰って、防具まで。

「あ、代金は立て替えるだけだからな」

心を読まれた！まさかのエスパー疑惑が浮上！

「頑張って、きっと返します！」

「期待してるよ」

そうこうしてるうちに、一軒の家に着いた。どうやらここがアナさんの家っぽい。

促されて中に入る。

「おかえりなさいニャ！」

1匹の猫…いやアイルーが。

「ご主人様、この方は誰ニャ？」

「まぁ話は後だ。とりあえずご飯にしよう」

「リョーカイニャ！すぐ用意しますニャ！」

そう言うとアイルーは、奥に走って行った。

「…という訳で、キン君は今日ここに泊まる事になった」

豪勢な料理をつつきながら、アナさんは状況を説明してくれた。正直もう言い飽きてたから、非常に助かります。

「リョーカイニャ。よろしくお願いしますニャ、キンさん」

「おっと、そう言えばキン君には紹介がまだだったな。彼はアイルーのゴンゾウ」

「…ゴンゾウですか。まぁよろしく」

その名前をアナさんが付けたとしたら、彼女のネーミングセンスは０％だ。

「…えっと、名前はアナさんが？」

「そうだが。良い名だろう？」

うん、０％だった。

第7話　えーと、うん。そうだ、ハンターになろうっと！（後書き）

今更ですが…システムの使い方に戸惑ってます。

改ページもイマイチ分かりませんし、なかなか大変です。

でも自分なりに頑張りますので、どうぞ暖かい目で…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4497d/

そうだ、狩人になろう

2010年10月10日07時14分発行